

令和3年度文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演事業－

ワークショップ実施計画書【コロナ対応版】

制作団体名	合同会社 大蔵流狂言山本事務所
公演団体名	大蔵流狂言 山本会

内容
<p>● 規模縮小版（45分～1時間）</p> <p>【お話】 狂言について分かり易くお話しします。</p> <p>【体験】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 狂言の基本所作（立居・歩く・走る）。</li><li>・ 狂言の発声。（声が出せる場合のみ）</li><li>・ 本公演で共演する際に謡う狂言小謡のお稽古。声が出せない場合は手拍子のみお稽古。</li></ul> <p>● オンライン実施版（45分～1時間）</p> <p>【お話】 狂言について分かり易くお話しします。</p> <p>【能楽堂の説明】 杉並能楽堂を使用し、能舞台について説明します。</p> <p>【狂言クイズ】 狂言についてのクイズをします。</p> <p>【体験】 声が出せる場合は、本公演で共演する際に謡う狂言小謡のお稽古をします。声が出せない場合は手拍子のみお稽古します。</p>

タイムスケジュール（標準）
<p>● 規模縮小版（45分～1時間） 狂言のお話（10～15分）→ 体験（35～45分）</p> <p>● オンライン実施版（45分～1時間） 狂言のお話（10～15分）→ 能楽堂の説明（10～15分）→ 狂言クイズ（15～20分）→ 体験（10分）</p>

**派遣者数** ※派遣者数の内訳を御入力ください

2～3名（主たる指導者1名、他1～2名）

**学校における事前指導**

特になし。

令和3年度文化芸術による子供育成総合事業—巡回公演事業—

本公演実施計画書【コロナ対応版】

制作団体名	合同会社 大蔵流狂言山本事務所
公演団体名	大蔵流狂言 山本会

<b>演目</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 狂言「柿山伏（かきやまぶし）」 「附子（ぶす）」</li><li>・ 小舞一番</li><li>・ お話「狂言の心と日本の文化」</li></ul> <p>時間短縮要請がある場合、狂言だけ、狂言1番とお話だけ等、学校側の要望に沿って組み合わせを変えて行います。</p>

<b>派遣者数</b> ※派遣者数の内訳を御入力ください
6～7名

<b>タイムスケジュール（標準）</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 狂言「柿山伏（かきやまぶし）」 「附子（ぶす）」</li><li>・ 小舞一番</li><li>・ お話「狂言の心と日本の文化」</li></ul> <p style="text-align: right;">公演時間90分</p> <p>時間短縮要請がある場合、狂言だけ、狂言とお話だけ等、学校側の要望に沿って組み合わせを変えたり、お話の時間を短くする等の対策を取ります。</p>

<b>実施校への協力依頼人員</b>
楽屋の準備と舞台清掃をして下さる方。

## 演目解説

### ・「柿山伏」あらすじ

修行を終えて遠路故郷に帰る山伏は、空腹のあまり途中にある柿の木に登って実を食べます。それを見つけ腹を立てた柿の木の持主は、山伏を散々にかからかい、ついには山伏が柿の木から飛び降りるはめになります。脚を痛めた山伏、こちらも怒って逆襲に出ますが。。。

### ・「附子」あらすじ

貴重品の砂糖に近づかせぬため、「附子」という毒だと偽って出かけた主人。留守番を任された太郎冠者と次郎冠者はそれを怪しみ、決死の覚悟で「附子」に近づき、ついにその正体を見破ります。砂糖をすっかり食べつくしてしまった二人は帰宅した主人にとんでもない言い訳をします。

### ・お話「狂言の心と日本の文化」

狂言を通して、日本古来の物の考え方を解説します。

## 児童生徒の公演への参加方法、公演に参加させるための工夫

本公演当日の最後に、演者指導の下、ワークショップを行います。初めに子供たちは発声練習を兼ねて狂言の笑い方や泣き方を体験します。

大きい声が出せるようになったら、事前に行ったワークショップで覚えた狂言小謡のおさらいをします。

その後、子供たちだけで狂言小謡を謡い、その謡に合わせて演者が舞います。

狂言小謡は簡単な謡なので、事前のワークショップに参加できなかった子供たちも、当日のワークショップで覚えることができ、共演することができます。

声が出せない場合は、手拍子で参加します。

## 児童生徒とのふれあい

子供たちが謡う（手拍子する）狂言小謡「蝸牛」に合わせて演者が舞うことによって、会場に一体感が生まれます。

この狂言小謡は650年前の子供たちが実際に謡っていた謡です。謡を通して過去に思いを馳せ、先人たちともふれあうことができます

蝸牛（でんでんむし）の謡は一度聴いたら耳に残る謡なので、実際に公演終了後も口ずさむ子供たちが数多くいます。実際に共演することで、本公演後も持続的に狂言の世界にふれることができます。

一度忘れてしまっても、子供の頃に触れたものは潜在意識の中に残り、大人になって改めて触れた時に、違和感なく狂言の世界に入っていくことができます。子供たちに狂言が印象的で楽しかったと思ってもらえるよう努めていきます。